
島尾敏雄作品集 第5巻

昭和四十二年七月三十日 初版
昭和五十二年二月十五日 十二刷

著者 島尾敏雄
発行者 中村勝哉

発行所 株式会社 晶文社

東京都千代田区外神田二―一―二
振替口座東京六・六二七九九番
電話東京(二五五)四五〇一

印刷 株式会社堀内印刷所
製本 有限会社美行製本

目次

島へ	九
マヤと一緒に	三
出発は遂に訪れず	吾
頑な今日	矣
夢にて	矣
搜妻記	九
集会のあとで	二〇
頃日のつとめ	二三
思屑録	二四

市壁の町なかで 一四

*
**

流棄 一五

日々の例 一六

日のちぢまり 一七

子と共に 一八

過越し 一九

奥野健男・解説 二六

年譜 二九三

装幀 今宮雄二

島尾敏雄作品集

第五卷

島へ

マヤと一緒に

出発は遂に訪れず

頑な今日

夢にて

捜妻記

集会のあとで

頃日のつとめ

思屑録

市壁の町なかで

島へ

島に上陸して白い道を歩いたが何も見えない。船の上から眺めたときも何も見えなかった。何も、と言ったが、洋上に位置を占める以上、島自体の存在があり、岡があり谷があり、草木が生え、珊瑚礁の泊が認められないわけはないが、でも私は何も見えないという気持を抱いた。たぶんそれは、人間臭い人工的な構造物が見えなかっただけだ。それなのに何も見えないと感じた。その日妻は紫がかつた着物を裾長に着て、裾をひきずつてるように見えた。着物の着付がどこおかしく、着物を着ているというよりはきぬをまとつているぐあいだ。帯の位置が高く、腕と腰のあたりにしわがかたまつた。でもそれはどこかのそういう着付を再現しているのかもわからない。私は妻の着付に不釣合を覚えながら、彼女の背景の歳月の重さを考えている。もし着物でなく、別な衣裳の何かであれば、島の風物

に映え、彼女自身をも美しくしただろう。しかしその違和感には別な感情も含まれていた。彼女の装う衣裳は私の皮膚にはりついてくる。

何かにいざなわれ、私たちはときおり島に渡つた。本土の都会の港から焼玉機関の小さな連絡船に乗つて出発すると、奥深く入りこんだ湾内の両岸に、歩行の程度ではどこまでも続く大地の横たわりの重なりが予想され、ほかの人にゆだねた単調な安定がある。行き交う美装された豪華船は海の上をすべるように移動し、その背景には、海辺に点綴された人間の営みの根柢が確かな根を据えているのうかがわれる。ところで、島への連絡船の方は、見た目にみすばらしく、わずかな波浪にもあえぎ、顔ぶれの変らぬ乗客が、においの悪い狭い船室で死人のように眠っている。やがて本土の辺端を遠ざかると、波がもりあがつてきてす

ぐにそれを見失う。船が小さいせい、別な場所に移り行く気持は起こらないで、海の奥の方に、下つて行くとしか思えない。船長は、船を操舵手にまかせきりにし、脇部屋丸椅子の上であぐらをかきながら、携帯ラジオを耳にあて目を細めてきき入つたままだ。

だが島影は見えてくる。幾つかの島が寄り集つていて、それぞれの名前があるにちがいないが、それを私は知らない。島の白砂や、生えている樹木がはつきり見えるあたり近づいても、船のゆれ動きは定まらず、なま酔いの気分、もういつのころからかはわからぬが、これらの島についてききかじつていたかんたんな知識が、思わぬ的確さをもつて島のそれぞれを言いつくし、個性づけているのを知つて、ふしぎな気持がする。あやうげに耳にとどめていたうわさが、ひとつひとつ、目のまえでその通りになる。でも、どの島にも人の住む気配の稀薄なことが、いぶかしい。キャンプの敷地に探したせるほどの人臭さが、接岸して水路をあとづけながらゆれ進む船の上から感じとれる。目の前をよぎつて流れ去る物体が、奥の方に見えない部分をひそませながら自分自身を展開して行く、島の不毛のすがたは、ちようど行き交う幽霊船の外からうかがうことのできる甲板上の細部に似ている。そこに在つたはずの人々の影が、潮にさらされた板やマストや鉄鎖、そして風にはため

く破れ布を執拗に支配しているように、白い砂浜や錯綜した樹木、浸蝕された岩肌、さだかでないにんげんらしい気配の影が、吸収されている。

水道を縫つて行くと、ひとつの島が次のものと交替し、島のあいだは望み見ることができるとの距離だが、それと結ぶ便船はないという。もし一方からほかの島に渡ろうとするなら、つい目の先に見えても、島々と本土とを結ぶただ一つのこの焼玉機関の連絡船の往復を利用するしかない。

島は、砂丘状のもの、くさつた虫歯に似たもの、なだらかな高さとそれを覆う生い茂つた樹木がうずくまつただけだものを思わせるものなど、それぞれの形状を持つていて、とぎれがちに伝わり広がつて行く個別的な言い伝えに、あてはまらうとしているように見える。私は、その一つの、ほかの島々にくらべてことのほか海岸線の出入りの多いことが目立つ島の、北風をさけ港口を南にひらいてするどく切れこんだ狭い入江の奥に、重なり合いつつへばりついているひとかたまりの木造家屋に目をひきつけられた。どんな場所にでも、人々の居住がそれぞれの地形に固着して築かれていなのを見ると、私はいち早くその区域を脱れようとする気持の起るのがおさえられない。そこにくりひろげられている生活は、映写幕の上では確かに存在しながら一

瞬にして永遠に過ぎ去つてしまふ選ばれた輝かしい映画の中の生活のように私の介入を拒否している。海端は崖と石垣で人工的にかためられ、切り立つた壁に海水が押しよせ、ふくれ上り、人家は石垣の一部分でもあるかのようになり、交錯して組立てられ、方角によつては城砦とも見え、或いは浮城のようにも眺められた。目をこらすと家屋の凝集のあいだを、狭いが川床の深い川が切れこんでいるので、本土の峡谷の温泉町に似た角度のあることにも気がつく。そこに生を享けないかぎり、ここの住人にはなれず、その居住のたたずまいは、私のこころのかどをけずりとして、やがて見えなくなる。

群れ寄つた島々をはなれてふたたび海洋のただ中に出たときに、行かなければならぬ島は、まだ先の方だということを得する。それはただ一つ洋上に位置を占めているが、その先の方にもなお孤立した一層小さな島が浮んでいるので、連絡船が本土を見失つたあとに辿りはじめるこれらの島々の並びは、頭の中に画いた地図の中では冷たくにざわつてゐる。

連絡船から、細長い小さな島舟に乗り移り、泊の水路を縫いながら私たちは上陸した。私は妻の手をひき、南の風になぶられて、多少は海水にひざをひたして白浜を上つて

きたように思う。白砂は、降りつもつた雪かと錯覚させられたほど、あたりの音響を吸収した静けさがあつた。海岸線の出入りのほとんどない、紡錘か、イカの骨を思わせる単調な恰好の島ながら、あきらかに、その存在は海を切りさき、海はそのために傷ついて、島のあとさきで白い腹部を裏返している。その痛みは、認めるには小さ過ぎるこの島にもその分け前を与えずにはおかぬ。海の肌を南側から受ける部分と、北で受けている部分は、地形が一つの島とは思えぬほど変つていて、別の側に根を据えたそれぞれの部落は、お互いを補い合うふうだ。

私と妻は町のようになつた大きな部落が目当てだつたとかえりみられる。この島のどこかに安息の場所があるようなのに、島に来てその場所をさがそうとすると、逃げ水のように、その所在があやふやになつてしまふ。部落のどの家も、かたく入口を閉ざし、外からのものををはじき返す。中央を貫通するただ一本の周島道路を廻つて部落の入口にとりつくともすぐ反対のはずれに出てしまひ、中の様子はつかまへようがない。同じ道をもう一度引き返すことが、どうしてか気易く行なえず、誰も見張りをしてゐるわけではないが、首筋が固く凝つて、通つて来た部落の中をふり返つて見ることもできない。通り過ぎた限りでは、部落のなか深くはいつて行く小路はどこにも見当らなかつた。道路

の両わきには珊瑚石灰岩を城壁のように積み上げた家々の
囲いがずつと続いていて、人のすがたを見つけたすことは
できない。石垣の高さが目の位置を越えているので、どう
なっているかわからないが、開放された、でも島外者には
閉ざされた中心の広場で、人々が笑い声をたてているよう
な、にぎやかなざわめきが、耳にはなく皮膚に感じられ
た。どこかに中の様子がうかがえる誘いの小道でも見つか
らないかと、緊張しつづけたが、効果は空しく、私たちの
背後では、はじけるような笑い声が部落の上空に広がり散
つたと錯覚した。どの部落も、そのなかを通りぬけるとき
はその内部を深くかくしたままふくれあがつて私を圧迫し
たが、通りぬけると、すべてが稀薄に背を低くしてしま
い、記憶から脱落しようとする何かへんなはたらきが生ず
る。

私と妻は東の突端のあたりから島の北側の方に歩いて行
った。この島が南西から北東の向きに、くさびを打ちこむ
ようにつきささっていることに、どんな理由があるかはわ
からない。だからその先端の方は末すばまりに細身にな
り、つかまえておろさない広くておそろしい海に向つて、
せいいつばい抵抗しているようだ。そしてそちらに向つて
歩いて行くと、言い知れぬ寂しさに襲われた。

道の右側には、タイワンアダンゲの株が、先のとがつた

肉の厚い葉を放射のかたちにひろげて並んでいた。葉はお
だやかな水色のエナメルをかためたように見え、葉の先の
かたいとげで、幅の広い部分を傷つけると、茶褐色の痕跡
が、あとあとまで消えずに残り、ところどころいたずら書
きがしてあつた。私の目はタイワンアダンゲの葉末越し
に、浸蝕されて気孔だらけのいぼいぼになつた黒い石灰岩
が、上陸者をそのところで阻む頑固な姿勢で、渚のあた
り一帯にへばりついているのを見ている。岩礁の上には青
のりの付着した部分もあり、遠目には広い庭園の人工的な
芝生をながめる気分になせる。なおその先の環礁にさえぎ
られて白く波立つ地帯が、道路に並行して受苦の円光のよ
うに島を取りまいているが、それらはみな目の高さで水平
のあたりで知覚され、たとえば、突兀とそびえた山塊や、
はるか雲際あたりに白雪をまといつて連なつた峯、或いは
人工の建築物によつて、視野をさえぎられることはない。
島自体に高さはなく、雲はまといつく対象を見つけて得ずに
荒々しく散つてしまひ、心もちふくらんだ中高の島の面を
片方から反対の方に、そのあたりを受けて海の上を渡る風
が破れ笛のようなきしりを放出しながら、なでさすり行き
来することをやめない。島はぐるりからはいあがる海の湿
気に濡れているのに、休息のない風のためにそれは吹きと
ばされてしまう。

道の左側は、砂糖きびの株が林のように続いていった。きびの株の間隔がせまく、葉が重なり合つて、中の方はよく見えないが、気のせいか、にぎやかな動きのある気配があつた。何人かがつらなつて歩きまわつてゐるような音がきこえてくるように思えた。きつと密生したきびの株を、防潮と防風のそしてまた外部からの目を防ぐたてにして、その内側に小中学校の運動場が設けられてゐるにちがいない。その子どもたちが教師に導かれ、大地を音たててふまえながら歩き廻つてゐるとしか思えない。島で子どもたちを見かけると、明るい陽さしのなかで、かけりがちのまぶたが、ほどけてくるのは事実だ。でも子どもはどことなく特権の表情をちらつかせて、押しつけがましい顔付を示した。その顔を見ると、私は胸もとのむかついてくるのが、われながらわからない。だから、たぶん、きび畑の向うの子どもたちは横着に教師に責任をもたせかけて、疲労の顔色をかくさずに、おさなりの行進をしてゐるだろう。できるならそれらを見たくないと思つてゐると、いきなり、きびの株が左右にさわがしく横倒しになつて、一列の隊伍を組んだ子どもたちが、道路の私たちの方に向つて進んできた。

うしろから目に見えぬ力で押し出されてくるように、子

どもたちは、なかば気が進まずにからだを反つてもたれかかり、それをうしろの者が支えながら仕方なく押して出る構えで、あごを深い仰角にしたまま私たちの方を見ようとするので、眼球が目の中中央にすわり、偏執者の顔付になつて近付いてきた。その目付に先ず気持を奪われた。最初ほかの部分はぼやけていたが、彼らはみんな下半身が素はだかだ。少年も少女も、ゆるやかな半袖の上衣をまとつてゐるだけで、下の構えがない。相手に何かをつきつけるためにやつてくるふうに、まつすぐにつきささる親密なものと、手さぐりで近づいてくる敵対の感情がいつしよになつて私たちを襲い、私はショックを受けた。自分をそこに投げ出して彼らの側にまぎれこんでしまいたい願いが、理不尽につきあげてきておさえられぬが、それを遂行することとは不可能だけでなく、その願望そのものがゆがんでゐるのではないかというおそれも取りのぞけない。そのためすべてをまともに見ることが出来ず、伏目がちになつたが、するといつそう彼らのはだかの輪郭が強い太さを持ちはじめ、私を圧倒しにかかる。原初のエネルギーが、陽にこげた褐色の顔の中から、ならびのいい白い歯を見せて、私のあやふやな立場を根こそぎつき崩しに來たのかと思つてしまふ。私は虚脱し、のがれようとする。子どもらは私のおびえが理解できないが、ただ彼らの後尾に歩調を合わせる

ようにくつつきながら子どもを押し出すようにならだを前方に傾けていた教師が、頬のすみに皮肉な笑いをただよわせているのが認められた。彼がそこで享有している立場に私はあずかれないという考えが、また私の腰を浮かせてしまい、妻をうながして、彼らに向いていた方向を変え、白い道を歩き出した。確かに目の中にあつた現前の光景が消失すると、ふくれた部分が目の底であざやかになり、追いうちをかけるぐあいに私の生存にすがりついてくる。皮膚を通してしみわたつてくるひりひりした快さとともに、近づかずによかつた、とささやく針の降るような音が耳の根のところにつきささる。もう見えなくなつた子どもらの目の、ことさらに黒々と大きいこと、唇が水をふくんだ朱色であつたことが、その特徴をいつそう際立たせてきた。さいわいに、あとも追われず、二人はどんどん道を急いだ。タイワンアダングの並木が、いつソテツに変わったのか気がつかなくなつた。それはまたいつか再びタイワンアダングにもどり、また交錯しながら、その葉末を越して或いは葉がぐれに、環礁のところで白く泡立っている海の気配にとりつかれていたことに変りはない。

島の北の部落は、はいつたと思うと出てしまい、どここのところで道をそれたか、私と妻は、いつのまにかなぎさのところを歩いていて、出入りのない単調な海岸線なのに、

視界が思ひのほか狭い。浸蝕孔だらけの黒い珊瑚石灰岩がじやまをして視線はそこでつかえてしまう。道の方から遠望していたときのひらたい感じがなくなり、人間のからだが人工的な巨石のあいだに沈んでしまうようだ。人工的な、と感ぜられるせせこましい展望の中で、私たちはパノラマの中のでく人形のように歩いた。黒い岩は、蝕れると皮膚をひき裂くことがつた刺をいつばいもつているのに引きかえ、なぎさの砂は白くさらされ、粘土質をふくんでいないので、そこに在るものをすべてはじき返しているように見える。岩はかりそめにそこに運ばれてきて、やがてまた位置を移すことが予定されてでもいるかのように、不安定な様子を示していた。

歩きにくい白砂をふみつけ、岩を左右に巻きながら進んで行つたが、やや傾いた太陽ながら、暑気はいつそう幅広く地上を包みこみ、後頭部をしびれさせた。疲労を感じると、自分以外の者とともに行動することはいらだちが生じ、それはおそらく同行者の妻の方でも同じことにちがいない。

見通しがきかぬから、島のどの部分に廻つたか見当を失い、どこを目あてにしてたどりつこうとしているのかも、あやしくなつた。

やがて砂浜が切れ、くちばしのように平たくつき出た小

さな岬に出た。土地にしがみついたしぶといつる草が一面に生えていて、緑色の部分と、さびたあかねに似た色の部分が縞模様になり、足下にふめばこわばつた固さがあつたが、遠い目で見渡すと、やわらかな芝生でしきつめられた庭園のようだ。岬の土地のふくらみでその向うの海は見えなかつた。

私は岬の突端の、地図で見た未測定のところを思い出し、そこに行つてみようと言うと、妻は眉をしかめて返事をした。

「およしなさい、あぶないから」

うかつなことだが、妻はにこにこ笑つて私に賛成してくれるものと予期していた。

「あなたは島のことはなんにも知らないわ。島のひとは誰もそこには行かないのよ。そんなところにわざわざ行くことはないわ」

と唇をとがらせたみにくい顔をこしらえて妻が言うのと、のびて行つた気持をいきなりねじまげられ、私は視線のやり場を失う。

「この島はとつてもせまいけど、泊にはいいこむと出られなくなるところがいっぱいあるわよ。よく知りもしないでうろろしてると、それこそたいへんよ。それにお日様はまだ高いけど、沈みはじめると早いよ。すたとんと海の

中にはいつてしまふんだから。そうなつてからはもう何んにも見えないの。あたしは道のところにもどつてバスの様子を見て来ます。だからあなたはここで待つていてくださいわね。いいわね」

妻はそれだけ言うと、はずれて来た道の方に、裾長に着た細いすがたで歩いて行つた。

あれが自分の妻の背中、と遠ざかつて行くそのうしろすがたを私はしばらくながめていたが、軽いめまいに襲われたので、右手で額をおさえ、目をつぶつて、おさまるのを待つた。しかし目の隅の旋回はいつこうに消えそうではない。刻みのついた光線の輪が、頭蓋の内と外とのあいまいな場所をとりまき、私の世界を小さく限定しようとする。

その現象が経過するに必要な時間がたたなければ、その輪ははずれてくれないので、自分より巨大な空虚な時間を抱えた蜘蛛のように、その場所でじつと待つていなければならぬ。ついで下の方ばかり見がちで、アシモトヲフカク、アシモトヲフカクなどあとさきのつながらぬことばを口の中であぐりかえしていると、五、六メートルも先のあたりの地面が、おかしくなぐあいに目にうつてきた。大地がそのところから切れてしまつてその先が見えない。自分の頭にかぶつてゐるぎざぎざの光の輪のせいかもしれない、ひとみをこらしてみても、はつきりしない。他のところを見る